

惟喬親王墓

844年に生まれた惟喬皇子は、日本の第55代天皇である文徳天皇の長子で、は850年から、32歳で亡くなる858年まで在位していました。

彼の父親の寵愛を受けていたとされるが、皇室内での競争は激しく、惟喬皇子の派閥は、彼の父の王位の相続人となる皇太子として指名されるための彼の活動に対する支持を得ることができませんでした。文徳天皇には6人の側室と29人の皇子・皇女がいました。

代わりに、惟喬皇子の弟である惟仁は、858年12月に8歳で天皇の称号を引き継ぎました。

惟喬皇子はその後、州知事などの多くの形だけの地位を与えられ、病気を患った872年に出家しました。

皇帝になることに失敗した失意の中、惟喬皇子は、897年に亡くなるまで大原で余生を過ごしました。

大原を見下ろす丘の中腹にある小さな墓は宮内庁によって惟喬皇子の墓として認められている場所ですが、日本国内の複数の町が、皇子が眠る土地であると主張しています。宮内庁の専門家が、皇子の墓地であると主張する各墓地の発掘を実施したところ、人間の遺体が見つかったのは唯一大原の墓のみでした。

墓は数段の石段を上がった、背の高い松の木の森の中にあります。苔で覆われた簡素な石碑が、石の塀で囲まれています。

惟喬皇子は、日本文学の3つの最も重要な作品の1つである「伊勢物語」（平安初期(794-1185)の出来事が語られる歌物語）に登場します。地元の伝説によると、惟喬皇子は、近くを流れる小さな川が京都に到達する大きな川に最終的に流れ込み、彼の魂が古代の首都に戻ることができると信じていたため、この場所に埋葬されました。